



# インドネシア

## BOP層家庭訪問調査レポート

- 調査実施日： 2013年10月
- 調査場所： 南ジャカルタ市プランパン地区
- 調査対象： ルスマリさん(仮名)の一家
- 換算レート： 100インドネシアルピア≒0.88円(2013年10月末)



### ルスマリさん



#### 家族構成

ジャカルタには妻1人との2人暮らしである。子供は中学生と高校生の2人で、中ジャワ州の農村にある実家に預けている。

#### 世帯収入

2人の収入合計は1ヵ月に1万円程度  
 夫：1日に4～6万ルピア～  
 7万5,000ルピア  
 妻：1日1万ルピア程度

#### 職業

夫：日雇いの建設労働  
 妻：家事手伝い

### ルスマリさんについて

中ジャワ州南部の農村出身。小学校を卒業した後、知人に付いてジャカルタに出てきた。それ以来、日雇いの建設労働に従事。契約期間は1週間のこともあれば、1ヵ月続く場合もある。ある建設現場の仕事が終われば、仲間の口コミ情報を頼って、次の建設現場の仕事を探す日々である。昨年と比べると、今年は仕事の数が若干減っているという。

### 世帯収入はギリギリの水準

ルスマリさんは、建設労働の仕事で1日に4～6万ルピアの賃金を得る。住宅建設の場合は1日7万5,000ルピアとやや稼ぎがよい。しかし、この中から交通費や食事代を支出するため、手取りで家に持ち帰れるのは6割程度に留まる。建設労働の仕事がない日は収入もない。賃金は日払いである。

妻は、毎日ではないが、近所の家の掃除や洗濯を手伝うことで、1日1万ルピア程度の収入を得る。毎日仕事があると仮定しても、2人の収入合計は1ヵ月に1万円程度にしかない。

### 家族構成

ジャカルタには妻1人との2人暮らしである。子供は中学生と高校生の2人で、中ジャワ州の農村にある実家に預けている。実家は農家で、親戚が5世帯あるが、いずれも土地を持たない農業労働者である。中にはスマトラやカリマンタンへ移住した者もいるが、まだ成功者は現れていない。

実家に残した子供の学費として、毎月20～30万ルピアを仕送りしているが、これだけで1ヵ月の収入の約2～3割を占める。仕送り資金が足りない場合には、友人・知人から借金をしたうえで、仕送りする。



## 住居

### 狭く薄暗い住居

家には1989年頃から住み、当初は借りていたが、2004年に購入した。購入資金は明らかにしなかったが、自ら100万ルピアを出し、残りは様々な人に資金を出してもらった。

部屋は寝室がメインで、寝室の隅に台所スペースがある。全部で15～20㎡程度の狭くて薄暗い。



ルスマリさんの家の入口



寝室 ベッドは意外に立派



台所スペース



台所スペースの鍋や釜

### 家電製品

テレビや扇風機は、住宅建設の現場で仕事をしている際、住宅所有者からもらった物である。

また、携帯電話は、友人から中古品を4万ルピアで買った物である。この携帯電話で、実家にいる子供たちと話をするのがとても楽しみとのことである。

### 電気・水道

電気代は1ヵ月当り2～3万ルピアを友人に支払う。5年前まで電気はなかったが、この友人が都合してくれて、今では電気のある生活である。

水については、カンブン(集落)のポンプで汲み上げた地下水を使っている。使用料はとらないが、ポンプが壊れた場合には、カンブンの住民が修理代を出し合う。



沐浴スペース

JETRO



## 食事

ルスマリさん夫妻の食事は質素で、あり合わせのものを食べている。台所には、ニンニクしか見当たらず、冷蔵庫も保有していない

パサール(市場)へ買い物に行くことはほとんどなく、家の近くのワルン(商人が他所からやってきて店を出す場所)でその日に食べる分の野菜などを買う。お金がない時には、ツケ買いをする。

鶏肉などは、特別に収入が入った時などに食べる程度で、普段は豆腐やテンペ(インドネシア風納豆)がタンパク質摂取源である。

ルスマリさんは、朝、建設現場へ出かける前にお茶を飲み、帰宅前にワルン・テガル(テガル出身者が多く経営する軽食屋台)にて、8,000ルピアのご飯とおかず3種類程度の定食を食べる。帰宅後は食事をとらず、お茶を飲む程度である。



## 時間

起床は午前4時。ルスマリさんはお茶を飲んで、午前7時半には建設現場へ出かけていく。お昼まで働き、1時間昼休みの後、夕方5時頃まで働く。帰宅途中、ワルン・テガルで食事をした後、午後7時頃帰宅。午後10時には就寝する。

妻も午前4時に起き、ルスマリさんを送り出した後、昼間は近所の家で掃除や洗濯をする。ルスマリさんが帰宅する前に家に戻る。

### 訪問後の感想

同じ都市のコミュニティと言っても、地方によって様相が異なる。前回(スラバヤでの事例)では自宅の周辺に家族や親戚が多数住んでいて、様々な形で助け合いが行われているのに対し、今回のジャカルタの事例では、異なった出自・出身地の者が寄り集まり、助け合いの範囲が限定的である。

ジャカルタには、ジャワ島の農村の人口増加や、土地再分化によって押し出された人々が新たな職を求めて流入し、その子孫もたくさんいる。もちろん、成功者もいるだろうが、ルスマリさんのようなギリギリの生活を送っている人々も決して少なくない。それでも、実家に残してきた子供のために毎月仕送りをしており、そのためにジャカルタでの生活をいかに切り詰めているかが想像できる。

都市インフラの整備は不十分な様子である。水道はまだ引かれていない。電気もおそらく、国営電力会社からの正式の配電ではない可能性がある。

家の中を拝見させていただいて、物が無いのがよく分かった。台所スペースには冷蔵庫はなく、ニンニクのかげらがあるだけで、食べ物のストックはほとんどなかった。部屋の中や沐浴スペースには洋服がかけられている。

家の中にはトイレがなかった。「トイレはどこか」と聞くと、20メートルほど離れたところに共同トイレがあった。カンプンの住民で共同使用しているのである。

BOPマーケティングの観点からは、やはり、単に物を売るというだけでなく、どのようなサービスがコミュニティの力をより生かし、生活を豊かにしていけるのか、という発想が求められていると感じる。

JETRO

【免責事項】本レポートで提供している情報は、ご利用される方のご判断・責任においてご使用ください。ジェトロでは、できるだけ正確な情報の提供を心掛けておりますが、本レポートで提供した内容に関連して、ご利用される方が不利益等を被る事態が生じたとしても、ジェトロ及び執筆者は一切の責任を負いかねますので、ご了承ください。